

国境 なき レシピ

クラスに1人が外国人の時代に

開国以来、海の玄関口として発展してきた神奈川県は、戦後も外国籍の住民が増加し続けています。神奈川県の統計によれば、令和5(2023)年1月1日現在の県内の外国人数は、239,301人となりました。これは、県民全体の約39人に1人という割合で、40人学級に例えるとクラスに1人が外国人、ということになります。

国別に在住者数の状況を見ると、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ネパールと、上位はアジアの国が続きます。その後はブラジル、インド、ペルー、アメリカ...という順番です。国ごとに、神奈川県との様々な関わりや背景があるわけですが、当然県内の地域ごとにも定住するコミュニティには違いがあります。戦前に来日、平成以降に工業団地に定住、母国からの避難、基地との関連、さらに既に日本に住む家族に呼ばれて...など、在住のきっかけや定住年数も様々です。県民としては、それぞれの地域の事情を捉え、互いの文化を尊重するとともに、国籍に縛られずに個々の信頼関係を築くことが大切ではないでしょうか。

外国につながる多様な子ども

子どもという視点から学校に注目しましょう。現在、ルーツは外国でも日本国籍を持つ子どもが増えており、また保護者の1人が外国人、あるいは2世3世など、一言で外国人

とは語れない、様々な子どもがいることに気づきます。外国籍を含め、そのような子どもたちを表す言葉に「外国につながる子ども」「外国にルーツを持つ子ども」などがあります。そういう意味では、クラスの1人、という割合を大きく超えて、教室の背景には多様な世界が広がっています。

一方、外国につながる子どもといっても、日本生まれで、ルーツがある国での生活をしたことがないケースでは、自分自身でルーツをネガティブに感じている場合があります。また、外国につながる子どもたちの多くが、残念なことにいじめられた経験を持ちます。見た目や名前、お弁当の中身や香り、言葉、勉強面といった様々な違いが原因になりますが、この解決にはすべての子どもが低年齢のうちから違いを理解し合う体験を重ねることが大切です。

国や肌の色に限らず、学級の一人ひとりが持つ違いに気づき、お互いを認め合う雰囲気育てていくことが求められています。

違いを楽しむ、食の体験

小学生までの子どもが生活する時間を大きく分けると、園や学校の時間と家庭の時間がありますが、現在注目されているのはそれ以外の時間です。例えば放課後の子ども施設や習いごと、あるいは休日の野外教育施設は、いつもとは異なる関わりの中で違いを理解し合う場として、効果的であることが研究で明らかになっています。

そこで、外国へのつながりについて、既に積極的に取り組みが進む幼稚園や保育園、学校だけでなく、例えば子ども施設や野外教育施設でも、意識的に話題に取り上げてみませんか。言葉は難しくても、例えば五感を使う「食」という方法なら、おいしく楽しく、印象にも残ります。

そんな思いから、今回、比較的活用しやすいレシピをこのミュージアムに取り揃えました。子どもたちのルーツの国もよし、地域にコミュニティがある国もよし。

もちろん日本や、地域のレシピもお勧めです。違いを楽しむ体験が、子どもたちの心を耕し、将来にわたって地域を豊かにします。

多様な神奈川県を、ぜひご賞味あれ。